巻頭言

（日蓮宗現代宗教研究所長）　田澤元泰

小松浄慎宗務総長選出に伴い、平成十七年十二月二十二日に日蓮宗現代宗教研究所長再任を受けました。新しい宗門運動が具体的に展開されようとするなかで、宗門の伝道活動の羅針盤として、研究調査活動をもとに、研究所関係者ともども一層の努力研鑽を重ねてまいりたいと思います。

学生時代に、知人から求めた古書を整理していたところ、ご遺文講義の二冊のなかに墨が塗られているページを見つけたことがありました。発見当時は、ひどいいたずらをするものだなと、不愉快には思っていました。後にそれが、戦時下におこなわれたご遺文削除に関連するものだということがわかりました。昨年の第三十八回中央教化研究会議にて、資料提供させていただきました。

ご遺文削除は昭和七年（一九三二）十月一日、内務省警保局が日蓮聖人遺文の字句の中に不敬に該当するものがあるとして指摘したことからはじまり、昭和九年十一月十日にも遺文削除問題が再燃しました。故石川教張先生は『戦時下の仏教』にて、出版停止・問題箇所の

空白あるいは「伏字」などの対応の事例を紹介されています。小生が提供した書籍は、『日蓮聖人遺文全集講義』（大林閣版）の中のものですが、この全集についても石川先生は、ご遺文削除に関する事例として、「遺文字句の一部を伏字出版している」ものと紹介されています。ところが小生所持の本には、黒々と墨が塗られています。今回提示した書籍は昭和十一年から十二年にかけて発行されたものであり、すでに関係当局の干渉を受けたはずのものなのですが、後に誰かの手によってページの上に墨が塗られたものと思われます。誰がなぜ何時そのようなことをしたのかは、今となっては正確に知る由もありませんが、いずれにせよその時代の大きなうねりによって、宗祖のご遺文に手が加えられた事実は、今でも見る者に、怒りとともに、そうしなければならなかった当時の宗門教師の心中を察すると、悲しみを感じざるをえません。

戦後六十年経過した今日、戦争の経験をもとに新しい平和国家をめざし再興してきた日本の生き方の中で、どこまで戦争に対する反省が行われたでしょうか。私たちは仏弟子として日蓮聖人の門下として、戦争に関わった歴史をどのように受け止めてゆくべきでしょうか。それは、当時の国の指導者や宗門の責任者を追及することではないと思います。われわれの先人が行ったことは事実として伝え残し、何が行われたかということを将来にわたっても認識し続け、風化させず、同じ過ちを自らもせず、他にもさせないための見識をしっかり持ち続けることだと思います。さらに重要なことは、そうした事実を恐れ反省し、そのような時代や社会が二度と訪れることのないように、人々に訴え続けてゆかなくてはならないことだと思います。

徳川家康が江戸に幕府を開き、当時の幕府の政策もあって、この頃に寺院が建てられ、開闢四百年を迎える寺院が多いといわれています。それぞれの村や町で、多くの先師たちによる布教展開の努力がそこにはありました。信仰によって人々が救われた伝説なども、多くあります。何も無かった所に寺院が建立されるというのは、昔も今も信仰をもととする大きなエネルギーが存在した証拠であります。寺院それぞれの縁起は異なりますが、共通することは、そこには救いがあったことです。宗門とは、こうした伝統の積み重ねであります。

日蓮宗で新しく展開する宗門運動「立正安国・お題目結縁運動」は、日蓮聖人が立正安国論を奏進されたご精神をもとに、正しい信仰が広まり伝えられる社会（立正）、人々が安穏に暮らせる社会づくり（安国）、が基本目標といえましょう。そのご精神とは、『安国論御勘由来』に述べておられる「但だ偏えに国の為、法の為、人の為にして身の為に之を申さず」であります。この姿勢とは、相手の苦しみを共有する慈悲の心から生ずるものです。全国の日蓮宗寺院教会結社および僧侶やその家族、さらには檀信徒をはじめとする寺院関係者が一丸となって、安穏で平和な社会創りに貢献してゆく目的から展開される具体的な布教伝道活動は、宗門そのものが社会に受け入れられ、認められ、社会を指導する立場になってゆくものと思います。法華経への信仰、お題目を広めるということの目的は、日蓮宗の寺院教会結社を興隆させするということではありません。多くの人々に法華経・日蓮聖人の教えを広めることによって、素晴らしい社会が実現するということを社会に知らしめて、多くの人々が理解し、共感し、信仰を持つことであり、結果として寺院教会結社が栄え、宗門が興隆することなのです。